

わたしが

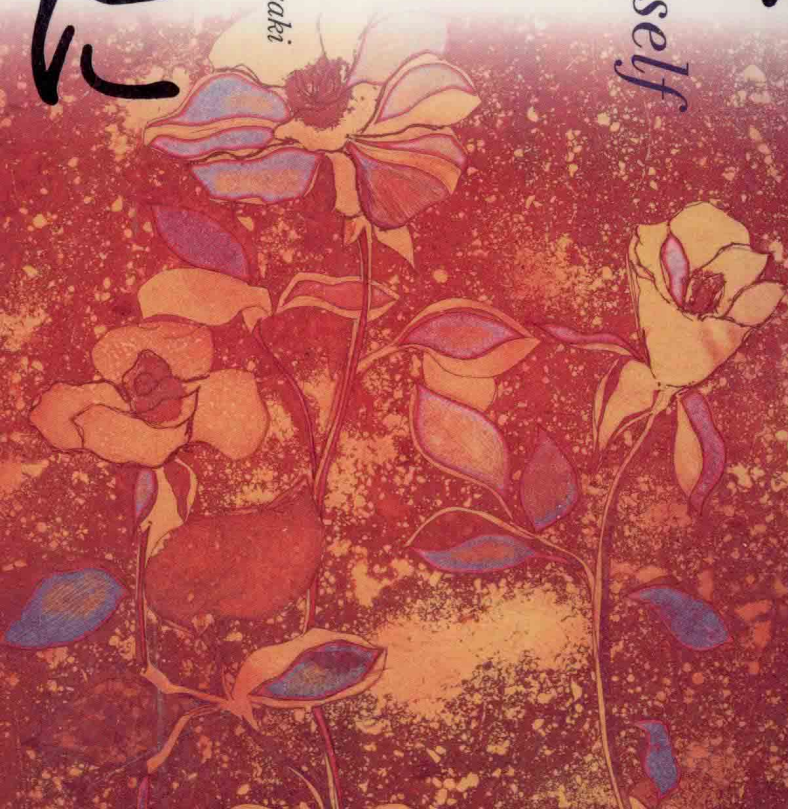
In order to be myself

わたしに

山崎朋子

Tomoko Yamazaki

なるために



わたし
 In order to
 わたし
 なるために
 山崎朋子
 Temuko Yamazaki
 江蘇工業学院図書館
 蔵書章

＜著者紹介＞

山崎 朋子（やまざき ともこ）

1932年生まれ、福井県出身。福井大学2年修了。結婚し母となってから女性史の研究を始め、ノンフィクション作家として認められる。『日本の幼稚園』（1965年・毎日出版文化賞）、『サンダカン八番娼館』（1972年・大宅ノンフィクション賞）『光ほのかなれども』（1980年・日本保育学会賞）『鳴潮のかなたに』（1983年）『アジア女性交流史』（1995年）など著書多数。

わたしがわたしになるために

一九九七年三月十八日 第一刷発行

著者 山崎朋子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二ノ十四ノ一 〒一〇四

電話 東京（〇三）三五四二―九六七

郵便振替口座 〇〇一一〇―九一四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申してください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©1997, Tomoko Yamazaki, Printed in Japan

ISBN4-7593-0496-7

わたしが
わたしに
なるために

目次

アジアの光、降る降る

韓国共生園の子どもたち——8

インドネシアの少年——12

ビルマからの手紙——18

木浦^{もつぽ}の涙——22

「故郷の家」——27

十年前の約束——30

タイ女性のササニシキ——34

一〇二八人の顔——38

筑豊ふたたび——42

癒される日は——46

「ナムムの家」の低い声——49

繋^{つな}ぐ人たち——53

戦争を知らない人たちへ——55

『東南アジア紀行』——58

わたしがわたしになるために

お米五升あれば——62

「君が代」に追われるごとく——65

父との対話——73

「死者」を生きる——78

自分の物差し——81

四十ワットの旅立ち——84

わたしの「東京物語」——88

プロバンスの思い出——91

わたしは変えない——94

「結婚入門」——97

徒弟修行——101

父の贈り物——104

輝いている人生

花より花らしく（三岸節子さん）—— 108

野菊のごとき（田中絹代さん）—— 110

キュックリッヒさんの仕事—— 114

晩年の平塚らいてう先生—— 117

おタネ叔母さん—— 121

「原爆乙女」はいま—— 124

網走監獄保存財団の中川イセさん—— 128

十六歳の選択—— 132

“職業”が支える女の人生—— 136

生きることのたしかさ

違いが分かる人に—— 144

知識か知恵か—— 153

わたしの就職講座—— 157

長い電話の向こうで—— 166

足腰をきたえる	170
わが柿の木坂	172
持つべきものは	175
わたしの猫たち	180
トラさん	184
十坪の庭	186
辞書をおいては	188
都会の暮しと田舎の暮し	191
あとがき	196
初出一覧	198

装画——桑名 正子

ブックデザイン——久保 和正

アジアの光、
降る降る

韓国共生園の子どもたち

韓国『全羅南道の木浦^{もつぽ}』という港町を訪ね、帰ってきたばかり。一九二七年といえど日本が朝鮮半島を植民地として支配していた頃ですが、それより今日まで、およそ七十年もの歴史を持つ孤児のための施設を取材に行ったのです。そのK園の歩みについては、ここでは触れませんが、そこで暮している子どもたちの笑顔がとても印象的でした。

K園は、山を背にして海に面した丘の上、山と海からの涼風が吹き抜ける位置に建っていました。そして、ちょうどその涼風さながらの爽やかな笑顔に接したことで、わたしは、子どもの幸せとは一体どこにあるのか——と、考えないわけに行かなかったのです。

もちろんこの笑顔は、ほんの少数の少女や少年たちのものです。今後取材を続けて行くなかで、おそらくは、親のない、あるいは事情があって親とともに暮せない子どもたちの持つ深い矛盾に、突き当たらざるを得ないでしょう。

わたしは八歳のときに父を亡くし、母子家庭の長女という立場に置かれました。母と、年子であった妹との三人暮らしが、高校を卒業する十八歳までつづきました。小さいときか

らいわゆる優等生であった妹と、泣き虫で小学三年生までオネショをしていたわたしとは、容姿も含めて、本当に、これが実の姉妹であろうかと疑われるほど違っていました。

母の愛したのはもちろん妹で、その傾向は、父が亡くなってからなおのこと強くなったように、子どものわたしには感じられました。

「かばってくれたお父さんはもういないのだから、わたしは、シッカリしなくちゃいけない」と真剣に考え、以来わたしのオネショは嘘のように消えたのですから、一種のショック療法だったと言えるでしょう。

母から褒められたという記憶をほとんど持たず、母が他人に自慢するのは、常に妹のほうでした。ほぼ同じ時期に北陸の町から上京しても、妹は母からの送金で大学生活を送り、姉のわたしは日給のウェイトレス稼業という違いは、わたしに、さまざまなことを考えさせるに十分でした。

まず、最初に取り組まなければならなかったのは、劣等感との戦いでした。その難問を自力で遮二無二克服しようとしているとき、まるで稲妻のようにひらめいたのが、「親といっても別の人間なのだから、無自覚に理不尽なことをすることだって、あって不思議はない」という考えです。そして、自分の胸に手を置いて静かに考えてみると、わたし自身

にしても、十分には得心の行きかねる言動をいくつもしていることに気づくのです。

苦しみのなかでそういうことに思い至ったわたしは、二十歳の自分に、強く何度も言い聞かせたものでした。――「わたしは、人が誤ってしてしまう理不尽な扱いを、許すというより超克して、正當に生きて行くのだ!」と。

このように決心しますと、わたしは生きるすべての局面において、親でも教師でも誰でもなく、自分だけを頼りにしなければならなくなりました。妹とであれ他の誰とであれ、境遇を比較してひがんだり、愚痴を言ったりする余裕はなくなったのです。

後年女性史を学ぶようになってから、わたしなどとは比べものにならない逆境を生きた多くの女性たちを知りました。へからゆきさんとして海を渡らなければならなかった少女たち。女たち、学校の門を一日もくぐることなく子守奉公に出なければならなかった少女たち。いずれも、実の親が承知であり、親の手によってそうした道を歩かされたと言ってさしつかえないのです。今日の、アジア諸国からのへじゃばゆきさんもまた然り。

貧困という社会的な背景から生み出されたこうした女性たちの境遇を、わたしは決して肯定するものでなく、むしろ、その真反対の立場に立つものです。けれども、人間の生活には、時として、どうしようもない理不尽や不公平の付きまとう場合が決して少なくありません。

問題は、その理不尽や不公平からくる矛盾を、いつまでも親や世の中の故^{せい}にして嘆き拗^すねつづけるか、自分の人生として丸ごと引き受け、開き直ったかたちで生き抜くか、その決意にかかっているような気がしてなりません。

親からも学校からも、まるでこわれ物を扱うかのように大切にされつづけている、今の日本の子どもたち。そういう日本の子どもにはない潑刺とした笑顔を、韓国『木浦の共生園』の少女や少年たちに見たのは、決して偶然のこととは思えないのです。

インドネシアの少年

わたしは文章によって表現をしている者の一人ですが、映画の持っている大きな力を認めないわけには行きません。九歳の初夏というと半世紀以上も前のことですけれど、父の殉職という出来事が映画化され、娘のわたしも、「伸子」という名前で登場するという体験をしました。

父が艦長をしていた最新鋭の潜水艦が八十九人もの乗組員を乗せたまま消息を絶ち、その行方は今もって分からないのですが、「東京湾南方ニテ名誉ノ殉職ヲセリ」という海軍省発表が行われました。一九三九年の十月の末、太平洋戦争開戦の前々年のことです。「天皇陛下」の大切な艦^{ふね}と兵士を失ったことは、当時としては決して名誉でなかったのですが、国民の戦意を昂揚させるべく「名誉ノ殉職」として扱い、さらに艦長や家族の生活を軍国美談とするために、『潜水艦一号』という映画が作られたのです。

泣き虫の父親っ子であったわたしの最大の関心は、父の〈名誉〉にもなければ国民の〈戦意昂揚〉にもなくて、ただ、「お父さん、生きていて、早く帰ってきてほしい」との願

いに尽きました。それゆえ、海軍省発表にもこの映画にも、反撥以外は感じなかったのです。

しかし、当時「少国民」だった人たちの中には、この映画『潜水艦一号』を見て、お国のために命を捧げる決意をしたという人も少なくないと聞いています。

こうしたわたしが、後年、思いもかけず映画と深い関係を持ったのは、著書のノンフィクション作品『サンダカン八番娼館』を映画の原作として提供したことによります。今回上映のインドネシア映画『青空がぼくの家』の監督スラメット・ラハルジョ・ジャロットさんと、その弟で、この映画のシナリオと音楽を担当したエロス・ジャロットさん、そして今回は製作という裏方に廻った女優のクリスティン・ハキムさんを知ったのも、映画『サンダカン八番娼館』の取り持つ縁でした。

ハキムさんとはじめてお会いしたのは南アジア映画祭の会場でしたから、もう十年以上前のことになります。偶然隣り合わせに坐ったわたしは、ハキムさんをひと目見て、この人の美しいのは容姿だけではない——と直感しました。幸運なことにハキムさんもわたしに何かを感じて下すったらしく、二人は、映画祭の会場を出てから、夜の更けるのも忘れて話し合ったのです。『青空がぼくの家』の字幕文の監修をされた、西広咲子さんという、こよなき通訳者を得て。

ハキムさんは、映画『サンダカン八番娼館』でもっとも心惹かれたのは、わたしがモデルである女性史研究者が主人公の元からゆきさんの老女と共に暮し、お互いの魂を通い合わせて行くところだ——と話されました。そして彼女は、「わたしたちも、インドネシアで、山崎さんのような姿勢で、すなわち底辺の人たちの立場に立った映画を作りたい」と言われ、さらに言葉を継いで、「山崎さん、あなたは、本を書くよりも映画を作ってほしい。すばらしい映画は、知識人だけでなく民衆の宝になるんですから」と言われたのです。一九八四年、わたしはある雑誌の連載インタビュー「アジアの女・アジアの声」の仕事で西広さんと共にインドネシアへ飛び、ハキムさんを訪ねました。その折彼女は、インタビューの場所を、ジャカルタの撮影所の他に、ジョグジャカルタのロケーション現場と郊外の「娼婦」更生施設に選ばれました。その施設をわたしが訪ねたとき、彼女はその施設の女性たちと一緒に井戸端で洗濯をしていて、「山崎さんと同じね」と言って微笑みました。

一九八八年には、ハキムさん主演、弟のエロス・ジャロットさん初監督の力作『チュツ・ニャ・ディン』が岩波ホールで上映され、このインドネシア民族独立運動のヒロインの伝記映画は、会場に感動の渦を巻き起こしました。その折もわたしは対談の機会に恵まれたのですが、ハキムさんが人間としてめざましい成長を遂げておられるのを知って、嬉しく